私の幼児教育論 II
〝幼児とともに〟

神沢良輔

二、幼児とともに
——幼児との生活の意義——

前回では、

(i) そこに幼児がいる

(ii) 幼児とともに成長し発達する

(iii) 幼児とともに成長を喜びあう

(iv) 幼児から学ぶ

ということで、主として、保育者からみた、幼児との関係についてみてきた。そこで今回も、同様なことについて、さらに続けてみていきたい。

(v) 幼児とのあたりまえの生活が尊い

現場での幼児との生活は、ある意味では、くり返しが多くて、単調である。

朝の登園のときの幼児との出会い、それに続いてなされる基本的な生活習慣にもとづくような活動、また、幼児みずから選んで行う経験や活動など、一日の幼児の生活の流れから見ていくと、園での幼児の一日の生活は、これといった変哲もないくり返しである。

そのため、ある保育者は、マンネリズム化してしまったといってはなげき、ある保育者は、問題意識がなくなってきたといって心配したりもする。このような保育に対する自分への批判は、決して無意味ではないし、ときにはきわめて大切なことでもある。私なども、毎年、年度の始めには、今年こそと思って、これまでの不十分だった点をいろいろと反省して、その年度の計画を立案してみるのであるが、その中でうまく実践に移されたものは、毎年きわめてわずかでしかないし、どうしても解決できない問題を

残して、いつも、これでよいのか、という不安につきまとわれている自分を発見することが多かった。

しかし、よくふり返ってみると、このようなことは、毎年新しく入園し、修了していく多くの幼児たちにとって、どれだけの意味があるのだろうかということが、幼児たちの元気のよい顔をみていると疑問になってくるのである。というより、実際はそのようなことは忘れてしまって、園での毎日の生活が、ひとりひとりの幼児にとって、いかに楽しく、充実してくり返されているかということの方が中心になってしまって、そのための努力ということで毎日おわれている自分に気づくということが多いのである。

つまり、それは外からみれば、きわめて単調なくり返しにみえるかも知れないけれども、その中で幼児は、全体的な発達を毎日続けているということに間違いはないし、そのようなくり返しは、決してなまやさしいものではない、ということなのである。

ややもすれば、そのような単調なくり返しにたえられなくなって、ことさらに奇をてらうようなことをしてしまうことも多いし、また、第三者からもそれに対して、いつまでも発展していないとか、もっと新しいものを打ち出せとか、いろいろな注文をつけられることもあろう。

でも、あたりまえのことを、あたりまえにすることぐらい、むずかしく、注意深く、努力を要することはないと思うのである。そこには、やはり、幼児とともに生活する保育者の真の姿があるのではなかろうか。

私なども結局は、新年度にたてた新しい計画も、毎日の保育を充実するための努力という、きわめてあたりまえの幼児の生活の充実ということに主力を置くということになり、その余力の中で、すこしずつ、毎年なにかを残してきたということになってしまった場合が多いのである。

もちろん、疑問をもって、研究的に実践するということを決して軽視しているわけではない。このことは、とても大切なことである。

いずれにしても、毎日の保育を充実させるためには、あたりまえのことを、どのようにしてあたりまえとして確立させるかということであり、それは、幼児とともに、どのように生活をしていくかという、保育の基本を実践していくことでもある。

(vi) 幼児とともに生活する

つまり、保育とは、幼児とともに生活する保育者との関係で成立するものであるという、きわめてあたりまえのことが、きわめてあたりまえの結論になるようである。幼児と保育者とが、とも

に生活している場所、それが幼稚園であり、保育園であるということができよう。

それぞれの園には、それぞれの園のもっているいろいろな問題がある。たとえば、園をとりまく地域の環境、園の規模、園の施設や設備、保育者の人数や年齢構成、保育者の受持つ幼児数などというものは、幼児との生活に、いろいろなかかわりあいをもって、いろいろな影響を与えているだろう。

私も、四日市市内の三つの幼稚園で、幼児との生活をしたが、それぞれの園には、それぞれの園のもっている特質や特長があり、一日の幼児の生活の流れでさえ、同じようにいくということは決してなかった。

でも、幼児たちはその中で生活し、発達しているのであり、幼児とともに生活している保育者がいるのである。それは、幼児に〃対して〃保育しているのでもなければ、幼児の〃ために〃保育しているのでもない。幼児と〃ともに〃生活する中で保育しているということである。

つまり、一方では幼稚園には大人である保育者がおり、そのもとに、なにも知らない幼児たちがいる。だから保育者は、そのような幼児に〃対して〃いろいろなことを教えてやるのだという基盤にたった保育がある。このような考え方が全面的に悪いということはいえないだろうが、しかし、ひとつ間違えば、幼児は保育者である大人のもっている、価値や規準からの要求が前面に出るため、それに対して、自分自身をかくすということを学習するだろうし、そのため、保育者を本当に信頼してくれないということにもなろう。

このような場合、幼児は保育者の前では、いわゆる〃いい子〃であり、保育者がいなくなると、それを幸いとして、反動的に逆の型になることもよくある。また、このようなことがくり返されると、ついには、無気力な、保育者のいわれるまま動くといった幼児に成長していく心配もでてくる。

たとえ、みかけは、幼児とともにいたようにみえても、幼児に〃対して〃する保育では、保育者の構えの中で、保育者が上位に立って幼児を保育するということになり、少なくとも、幼児との平等の立場にたった中でなされる、人間としての相互の信頼関係は成立しないということになる。そのため、幼児は保育者と遊ぶということはしないし、幼児の自発的な活動は、著しく阻害されることにもなる。

このような保育のもつ問題点については、過去において、十分に経験ずみのことであろう。幼児たちに〃先生遊んできてもいい〃とか、〃先生、こんどはなにするの〃などといわれた苦い経験を

もっているのは私ひとりではなかろう。

また、他方では、私は幼児の〝ために〟一生懸命しているのだと考えてしている保育がある。これも決して全面的にいけないということはいえないだろうか。ややもすると、そこに幼児のいない保育になる恐れがある。

幼児のために、環境構成をしっかりして、指導計画をたてる。このことはとても大切なことである。しかし、それが幼児の実際的な活動の中から出てきたものを、主体としたのであればよいのであるが、幼児の〝ために〟ということだけが前面に出れば、保育者の一方的な保育になる恐れがあるとともに、幼児の生活を無視することになる。

このような、幼児に〝対して〟、幼児の〝ために〟という保育では、そのことの理由のために、保育者にとって、また、保育者である大人にとって、きわめて都合のいい保育になる場合が多くでてくる。ときには、幼児不在になる可能性がある。

しかし、幼児の行動は、大人の期待どおりいくものではないし、幼児のもっているエネルギーの消費の大きさは、大人の予想をはるかにこえたものである。そのため、幼児の行動は、大人からみれば、きわめて偶然的だと思われる契機によってなされることが多いし、その予測は、具体的場面においては不可能に近いといえる。

だから、そのためには、どうしても、幼児と〝ともに〟ということが、保育の基本にならなくてはならない。いずれにしても、このような、幼児と〝ともに〟生活しているという実感の中に、現場での保育のよさがあるし、研究者は、そのような現場での保育に学ばねばならぬことが多いと思われるのである。それは、ただ幼児のみを研究するというだけではなく、幼児を含めた保育者の生活をみていくことに、もっとも大きな意義があると思われるし、そこに現場があるのである。

逆説的ないい方をすれば、幼児とともにいるからこそ、幼児はかわっていくのであろうし、発達していくのである。そのような保育者の構えの中に、保育のもっとも大切な基本があるのではなかろうかと考えるのである。

結局、私は、何だかこのような保育の基本をもとめて、それをいかに現場での実践の中に生かすかということで、四日市における幼稚園での生活が始まり、そのことで終ったようにも、今から思えば考えられるのである。それは、決して十分に成果をあげたとは思わないし、どのようにすればよいかについては、やはり、今後とも幼児とともに生活している保育者といろいろ実践を通して考えていかねばならない問題であると思っている。（つづく）